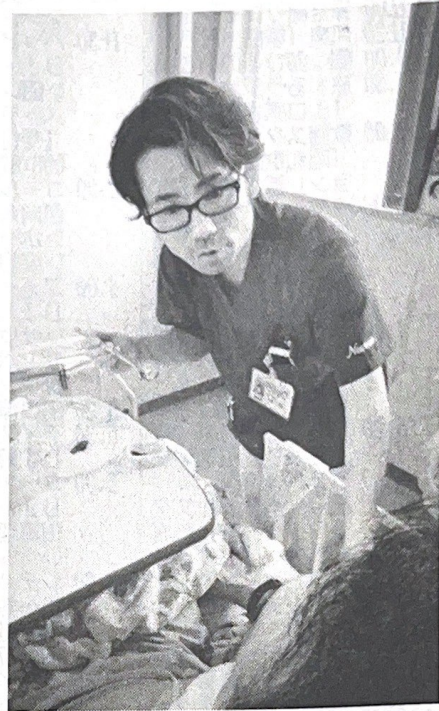


食・嚥下（えんげ）障害看護認定」看護師の大城清貴さん、精神看護専門看護師の山崎千鶴子さん取材した。

## 寄り添い、支える 看護師の現場

### 摂食・嚥下障害 看護認定看護師 大城 清貴さん



脳梗塞の男性へ飲み込みの指導をする県内で1人しかない「摂食・嚥下障害看護認定」看護師、大城清貴さん。15日、豊見城市の豊見城中央病院

# 飲み込む喜びを支援

「ごくんした音は聞こえますか」。豊見城中央病院Ⅱ豊見城市Ⅱに勤務する大城清貴さん(35)は、県内で1人しかない「摂食・嚥下障害看護認定」の看護師だ。

15日、大城さんが入院患者は、大城さんが指導しながら

らゼリーやとろみを付けたお茶をゆつくりと飲み込む練習をしていた。男性の妻にも、介助のやり方を指導。時々むせ込みながらもゼリーを口にした男性は、笑顔を浮かべた。

大城さんは昨年7月、愛知県看護協会での約半年間の研修を受けて摂食・嚥下障害看護認定を受けた。

同認定看護師は全国で約300人いるというが、沖縄では研修できる機関がない。

大城さんの役割は、脳梗塞などで摂食・嚥下障害がある患者について医師や看護師から依頼があれば、飲み込みの反射があるかどうか患者の機能を評価しながら回復までのスケジュールを作成。言語聴覚士（ST）らと機能に合った安全な摂食、嚥下ができるようにするリハビリを考える。認定看護師が関わることで医師、看護師とSTをつなぎ、チームで取り組めるようになった。

「チームで関わり家族の協力を得ながら、総合的なアプローチで口から食べることを支援したい」と大城さん。急性期病院が早めにリハビリを始めることで患者の機能回復につながる。「急性期のリハビリは一部でしかない。回復期病院、在宅へどうつなぐか、今後の課題」と大城さんは連携の必要性を強調した。

(国吉美千代)